

「わたしたちのことば」に創発する居場所

—留学生の逸脱的日本語によるあそびの分析から—

井濃内歩（筑波大学大学院人文社会科学研究所）

1. はじめに

越境により社会の周縁に位置づけられがちな子ども・若者にとって、主体的に他者と関わり、安心感や肯定感を得られ、既存の権力構造に抵抗する力を秘めた「居場所」のあり方の探究は、越境する人びとの生を理解と支援を目指す異文化間教育においても、重要なテーマとなっている。これまでの研究からは、オンライン空間や想像の世界など、物理的な場所に限定されない可変的な居場所を、若者が主体的に創造していることが明らかにされてきた（額賀，2014）。

他者との新しい関係性とは、ことばを介したやり取りの場のなかに生まれ来る。本稿は、「ことば」を社会の中で動的に変容生成する「文化そのもの」と捉える言語人類学の視座（Ahearn, 2021）から、ある留学生の日常的な言語実践のなかに創発した、「ことばの居場所」の姿を提示するものである。抑圧的な規範性や権力関係と結びついた学習言語の「日本語」を、能動的に逸脱して笑い、「わたしたちのことば」へと作り替えていくあそびのなかで、留学生たちが互いの差異を超え、留学生生活を支える重要な居場所を創り上げていたさまをいきいきと描き出したい。

2. 調査概要

調査対象は、関東のある大学に留学中の日本語・日本文化研修留学生（以下、日研生）12名である。国籍別にブラジル・モンゴル各3名、ベトナム2名、ロシア・カンボジア・中国・韓国各1名からなる多国籍グループで、日本語が共通語となっていた。参与観察・半構造化インタビュー・会話の録音・録画といったデータ収集方法を組み合わせたエスノグラフィックなフィールドワークを行い、彼らの言語使用とそこへの意味付けを探った。

3. 日本語で遊ぶ、日本語を遊ぶ—「日研生ジョーク」が立ちあげる位置取りと居場所

日研生の日常会話では、意図的な誤用やスラング、インポライトネスといった、教科書に載っているような標準的な日本語使用から逸脱した言語資源を使った、冗談実践が頻繁に観察された。彼らはこれを自ら「日研生ジョーク」と呼び、グループ独自の言語実践として意識化していた。以下はインタビューで挙げられた、意図的な誤用（例1）とインポライトな発話（例2）による「日研生ジョーク」の例である。

【例1】（食堂で離れた席に先生がいるのを見つけ、何と声をかけるか相談していた時）

B: 先生、何食っていらっしゃいますか

【例2】（飲み会でお互いの第一印象を言い合っていた時のエピソード）

01 J: 例えばあなたは優しいとかあなたは::面白いとか<そういうコメントをして

02 いるとき私は¥Qさんに::¥ huhu <¥本音を::言えよ::¥>

03 A: ha[hahahaha

04 J: [.hhh¥て言ってそしてみんなすごくウケて::!¥>そしてみんな<

05 う::んこれは: <日研生の::ことば::に:>しよう! 日研生の::なんか共通のことばにしようみんな(.)話した

実践に対する解釈の分析からは、「日本語」と結びついた「日本=日本人=日本語」という結びつきや、「正しい」日本語イデオロギー」（三代・鄭，2006）といった支配的言語イ

デオロギーの存在が浮かび上がった。こうしたデオロギーは、彼らの日本語での自由な自己表現を抑圧する。しかし、インタビューや「日研生ジョーク」の詳細な分析からは、「日研生ジョーク」が、日本語の「正しさ」を逆手にとってあそび、「わたしたちのことば」へと作り替え、そこに創造的な社会的意味を結び付けることで、「外国人」でも「留学生」でも「日本人」でもない、複雑な位置取りを創り出すものであったことがわかった。発表では、実際の実践のやり取りやインタビューの語りを丁寧に読み解きながら、彼らの実践が立ちあげていたニュアンスのある位置取りと、差異を超えたつながりを浮かび上がらせる。

4. 「ことばの居場所」の探究に向けて

90年代以降、日本語教育に内包される権力構造や、ことばとアイデンティティの複雑な関係性を批判的に問う議論が活発に行われてきた（佐藤・ドーア, 2008）。一方、日本での言語とアイデンティティや社会関係の研究においては、インタビュー調査が中心であり、実際の人びとのやり取りを分析し、その中に多様なアイデンティティを捉える研究が少ないことが指摘される（羽鳥(江頭), 2009）。本稿は、留学生の日常会話を精緻に分析することで、越境する若者が単に言語デオロギーに抑圧されるだけではなく、「今ここ」でことばを介して他者との創造的な関係性を生み出すさまを描き、ことばとその社会的意味の動態と、ことばに創発した「居場所」の姿を具体的に描き出した。

私たちの社会文化や関係性を、相互行為的過程のなかで編まれるものと捉えるならば、そこには必ずことばがある。研究においても情報や意志伝達の媒介や道具とみなされ、それそのものの文化性が見落とされがちな「ことば」を、社会文化が顕在・生成・変容するまさにその場所と捉え、人びとの関係性の動態を読み解くアプローチは、ますます多言語空間となる日本社会のなか、日常の片隅に創発する多様な「ことばの居場所」を描き出す可能性を秘めている。

参考文献

- Ahearn, L. M. (2021) *Living Language: An Introduction to Linguistic Anthropology*, 3rd edition, Hoboken, NJ & West Sussex: John Wiley & Sons Ltd.
- 羽鳥(江頭)玲子 (2009) 「複合アイデンティティと日本語教育研究」『WEB版リテラシーズ』6(2), 21-26, <http://literacies.9640.jp/dat/litera6-2-3.pdf>, <2021年3月31日アクセス>.
- 佐藤慎司・ドーア根理子 (2008) 『文化、ことば、教育—日本語／日本の教育の「標準」を越えて』明石書店.
- 三代純平・鄭京姫 (2006) 「「正しい日本語」を教えることの問題と「共生言語としての日本語」への展望」『言語文化教育研究』5, 80-93.
- 額賀美紗子 (2014) 「越境する若者と複数の「居場所」—異文化間教育学と居場所研究の交錯—」『異文化間教育』(40), 1-17.

【文字化資料】

[複数の発話の重なり始めた位置	=	前後の発話が切れ目なく続いている
(0.0)	沈黙の秒数	(.)	0.1 秒程度のごく短い間合い
:	直前の音の延び、数は相対的長さ	-	直前の語や発話の中断
,	発話が続くように聞こえる抑揚	° °	弱く発話されている箇所
?	尻上がりの抑揚	∩	やや尻上がりの抑揚
!	声が弾んでいる	↑	直後の音が高くなっている
hh	息を吐く音、数は相対的長さ	.hh	息を吸う音、数は相対的長さ
><	速く発話されている箇所	<>	ゆっくりと発話されている箇所
¥¥	笑いながらの発話	((word))	筆記者の補足的な注記